

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

ギャング・オブ・ニューヨーク

配給／松竹、日本ヘラルド映画

2003 (平成15) 年1月2日鑑賞

Data

監督：マーティン・スコセッシ

出演：レオナルド・ディカプリオ／

キャメロン・ディアス／ダニ

エル・デイ＝ルイス

👁️👁️ みどころ

01年の9月11日ニューヨークで起こった同時多発テロの影響で、1年間上映が延期された。そして02年5月、カンヌ映画祭で上映された20分のダイジェスト版だけで大評判となったアカデミー賞最有力候補の超大作。舞台は1860年代のニューヨーク。そして、イングランドvsアイリッシュやプロテスタントvsカトリックの対立を底流としたギャング団の抗争がテーマ。レオナルド・ディカプリオとキャメロン・ディアスもいいが、ネイティブ・アメリカンズを名乗るギャング団のボス、憎まれ役のダニエル・デイ＝ルイスの演技が実にすばらしい。ピカーの超おすすめ作品だ。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

<遂に観た、感動作>

遂に観た。構想30年、撮影270日、製作費150億円。全世界待望の超大作が遂に02年12月、日本で公開された。以前から楽しみにしていたこの作品を、私は03年のお正月(1月2日)に観ることができた。そもそもこの映画は、01年12月の公開予定だったが、01年9月11日のニューヨークでの同時多発テロの影響で公開が1年遅れたもの。02年5月のカンヌ映画祭では、20分のダイジェスト版が上映されただけで大きな話題を呼び、公開が待ち望まれていたものだ。見終わった感想は……。すばらしいの一言だ。1月6日の新聞報道によれば、小泉純一郎総理大臣も正月休みの最後の1月5日にこれを観て、「感動した」と述べたとのことだ。

<3人の主人公たち、そして監督>

若き主人公アムステルダムを演ずるのは、あのレオナルド・ディカプリオ。殺された父

親ヴァロン神父（リーアム・ニーソン）の復讐に燃える若きギャングの役だ。

もちろんディカプリオもいいが、この映画の本当の主演は、ダニエル・デイ＝ルイス演ずるギャング団のボス、ビル・ザ・ブッチャーだろう。彼は単なる非道な悪役ではなく、深い信仰心と揺るぎない価値基準を持つ人物。そしてまた、ギャング団のシステムづくりや能力のある人間の登用などについて抜きでた「頭脳派」としての能力をもっている上、肉屋でボクサーという経歴。従って、肉切り包丁での「殺し」では右に出る者はいない、「武闘派」のトップとしても長年君臨してきた人物だ。

そしてもう一人、この二人の間で重要な役割を果たすのが、キャメロン・ディアス演ずる美貌の女スリ、ジュニー。ケンカ、盗み、売春等何でもありのニューヨークのスラム街の中、彼女は巧みな処世術で生き抜いている極めて魅力的な女性だ。

アムステルダムが彼女に惚れるのは当然だが、ビルの暴力支配が貫徹しているニューヨークのファイブ・ポイントというスラム街の中で、実は彼女もビルの庇護の下にあった。これを知ったアムステルダムは当然怒り狂う。しかし・・・。

監督はマーティン・スコセッシ。自分が生まれ育った街、ニューヨークを舞台とした作品を数多く発表している、アメリカを代表する監督の一人だ。『ギャング・オブ・ニューヨーク』では、ニューヨークのファイブ・ポイントというダウントウンを石畳から教会、売春宿の建物まで、そしてまたナイフ、スプーン、飾り物等の小物に至るまで徹底的に再現させている。

<映画の理解のために不可欠な勉強>

その1 宗教のこと

この映画の理解のためにはたくさんの勉強が必要だ。まず第1は、アメリカ新大陸へ移民した人たちの宗教のこと。そしてイングランド対アイルランドの対立の構図の理解が必要だ。宗教とはもちろんカトリックとプロテスタントの対立のこと。ビルが支配する「ネイティブ・アメリカンズ (Native Americans)」のギャング集団は、イギリス系でプロテスタント。もともと「ネイティブ・アメリカンズ」とは、原住民のインディアンのことだが、最初に自由の国アメリカに渡ったイギリス人たちは、アメリカで生まれた自分たちのことをこう呼んだとのことだ。

これに対してアムステルダムやその父ヴァロン神父は、アイルランド系の移民でカトリック。先住のイギリス系人種から見れば、後から次々とニューヨークに入り込んできたやっかい者集団だ。彼らは「デッド・ラビッツ (Dead Rabbits)」(死んだウサギ) と呼ばれるギャング集団を形成した。そして抗争の際には、死んだウサギを杭に突き

刺して突進したらしい。

その2 ギャングの系譜

第2は、ニューヨークでのギャングの発生の必然性とその系譜の理解だ。白人VS黒人の対立、イングランドVSアイリッシュの対立、さらにはスペイン系、ユダヤ系、イタリア系、中国系その他ありとあらゆる人種が「実力主義」でせめぎ合っている。そのうえ銃の所持が自由な国だから、当然、力のあるものが街を支配することになる。もちろんオモテ社会との共存を前提としてのウラ社会だが、人間の離合集散、権力争いは古今東西、世の常、人の常だ。

ギャング映画の最高傑作『ゴッドファーザー』（1972年）で描かれたコレオーネの一族は、イタリアのシチリア系の移民。イタリア系のマフィアのボスである「アルカポネ」の名前くらいは、日本人なら誰でも聞いたことがあるはずだ。このようにこの映画を本当に理解するためには、深く突っ込んでニューヨークのギャング集団の抗争の歴史を勉強する必要がある。

その3 南北戦争

第3は、アメリカの南北戦争だ。奴隷解放論者のリンカーンが大統領に選ばれたため、奴隷を使つての大規模農業経営を基盤としていた南部はこれに反発。南部連盟を結成してアメリカ合衆国から離脱し、南北戦争が始まった。アメリカでの奴隷の物語は、子供のころ誰もが読んで涙した『アンクルトムの小屋』で有名だし、南北戦争は、有名なマーガレット・ミッチェル原作の『風と共に去りぬ』の小説やヴィヴィアン・リーとクラーク・ゲーブルが主演した、あの映画『風と共に去りぬ』（1940年）等で断片的なことは知っているはず。しかしほとんどの日本人はその詳しいことは知らないだろう。この映画でも1861年の南北戦争の勃発や1863年の徴兵制度の強制によるニューヨークでの4日間の大暴動が大きな時代背景となっている。

その4 アメリカの民主主義

そして第4は、政治家などの公職に就くべき者を選挙という形で選ぶアメリカの民主主義の姿だ。これがきちんとシステム化され、正常に運営されていると考えたら大間違いだ。何せアメリカは多民族国家。そして1860年代といえば建国後まだ若い国。しかも国民が銃を持つことが公認され、国民のほとんどが銃を持っている。また何でもアメリカには日本のような戸籍制度は無く、日本のように厳格な住民登録制度や選挙民（有権者）の登録はできてないようだ。だから「リポーター」と呼ばれる同一人物による重複投票やギャング団による投票への大量動員なんてことはごく当たり前の姿だった。

そういえば現在のアメリカ大統領ブッシュとゴアが争った2000年の大統領選挙で

は、穴あけ式の投票用紙でははっきりと判別できない票があったり、数々の不正投票の疑惑が表沙汰になったりしたことは記憶に新しい。

その5 ニューヨークという街

第5は、ニューヨークという街のあり方、そしてその街の地理だ。2001年9月11日の同時多発テロで、ニューヨークは一段と有名になったが、今やニューヨークは世界の超高層ビルが立ち並ぶ大都会であり、1860年代のスラムの面影はどこにもない。従ってこの映画はニューヨークではなく、イタリアのチネチッタという場所で撮影されたとのこと。このように1860年代のニューヨークという街の実像やその地理は、日本人には当然、アメリカ人にもよく分からないものになっている。

映画冒頭のアムステルダム之父ヴァロン神父率いる「デッド・ラビッツ」と「ネイティブ・アメリカンズ」との雌雄を決する戦いは、「ファイブ・ポイント」という場所で行われたが、これはマンハッタン島の南部にあり、5つの通りに沿って広がっていたスラム地区だ。今はシティーホール、連邦裁判所、ニューヨーク州裁判所等の行政、司法の中枢機関が集まり、当時の面影は全くないとのことだ。

以上述べた5点を深く勉強してこの映画を観れば、この映画の価値や楽しみ方がより一層充実したものになると思う。そしてその勉強のためにはこの映画のパンフレットがピカ一だ。定価800円だが、その内容の充実度はすごい。読むのも大変だが、この映画に関しては必ずパンフレットを購入することをお勧めしたい。

<文字通りの壮大な叙事詩の展開>

デッド・ラビッツとネイティブ・アメリカンズとの決着をつける、いわばヤクザ同士の「出入り」は1846年に行われた。その戦いでデッド・ラビッツは敗北し、そのボスであったヴァロン神父はビルに殺された。しかしその16年後、この「出入り」と父の死を目に焼き付け、ビルへの復讐のみを生き甲斐として少年院に入れられたアムステルダムは、再びファイブ・ポイントに戻ってきた。

1862年の今、ファイブ・ポイントはビルの一人天下。かつてのデッド・ラビッツの幹部も今はビルの手下として働いていた。アムステルダムはそんなビルの懐に入り込み、次第に頭角をあらわしていく。

当然ファイブ・ポイントには女もいる。ジェニーはたくましく生きる美貌の女スリ。アムステルダムとジェニーは互いに惹かれあうが、実はジェニーはかつてビルの庇護を受けたことがあった。そんな中二人の恋の行方は・・・。

他方、アムステルダムの幼なじみのジョニー（ヘンリー・トーマス）もビルの支配下で

働いていた。しかし次第にビルに重宝され、また自分が惚れていたジェニーとアムステルダムがいい仲になっていくことにジョニーは嫉妬し、遂にアムステルダムの素性をビルにバラしてしまった。アムステルダムはビルの手によってトコトン痛めつけられながらも殺されず、「裏切り者」として生きることを強要された。アムステルダムを必死で看病するジェニー。そしてアムステルダムは再びデッド・ラビッツを結集し、ビル率いるネイティブ・アメリカンズと決着をつけようとした。そんな中、南北戦争は激化し、徴兵制度が強行されようとしていた。そしてデッド・ラビッツとネイティブ・アメリカンズとの対決の日、徴兵制度反対の暴動が起り、ニューヨークのファイブ・ポインツには軍隊が動員された。さあ、デッド・ラビッツとネイティブ・アメリカンズとの対決は……。そしてアムテルダムとビルとの対決は……。

＜アカデミー賞のノミネート間違いなし！＞

この映画のあらすじはざっとこんなもの。この程度の子備知識は持っていても別に鑑賞の妨げにはならないはずだ。しかし、ここでこれ以上詳しいストーリーを紹介することは無意味なことも間違いない。あとはとにかく観てのお楽しみだ。

アカデミー賞最有力候補の呼び声は決して誇張ではない。私の予想では、この映画はマーティン・スコセッシは監督賞に、レオナルド・ディカプリオ、キャメロン・ディアス、ダニエル・デイ＝ルイスの3人は、それぞれ主演（助演）男（女）優賞にノミネートされるのではないかと。それほどすばらしい作品に仕上がっている超おすすめ作品だ。なおくどいようだが、くれぐれもパンフレットでのお勉強をお忘れなく。

2003（平成15）年1月6日記